

研究ノート

言語学的に正確な翻訳

中井 悟

1. はじめに

翻訳というのは、簡単に言えば、ある言語に於けるある表現を他の言語の同等の表現に置き換えることである。例えば、Catford は、翻訳を次のように定義している。

Translation may be defined as follows:

the replacement of textual material in one language (SL) by equivalent textual material in another language (TL).¹⁾

しかし、これは容易なことではない。文法には、音韻部門、統語部門、意味部門とあるが、それぞれの言語で固有の特徴がある。例えば、日本語の「さらさら」を英語に訳す時には、s-音の繰り返しの効果を考えねばならないし、リズムやイントネーションやアクセントのことも考えねばならないであろう。語彙を取り上げてみても、日本語と英語の語彙は一致しない。例えば、日本語の「風」と英語の wind は同じではないし、日本語の「あつい」と英語の hot は同じではない²⁾。こういった翻訳に関することを研究するのが、翻訳理論 (translation theory) であるが、Catford は、翻訳理論の中心課題を次のように述べている。

The central problem of translation-practice is that of finding TL translation equivalents. A central task of translation theory is that of defining the nature and conditions of translation equi-

valence.⁸²⁾

従来から、翻訳に関する問題として音韻に関することや、語彙に関することや、文化的な違いに関することは取り上げられ、研究されてきた。本稿で取り上げるのは、1957年の Noam Chomsky の *Syntactic Structures*⁴³⁾ に始まる生成文法の研究成果を取り入れた統語部門に関する翻訳の問題である。生成文法は、Ross の *Constraints on Variables in Syntax*⁶³⁾ に代表されるように、文法の規則は各種の制約に従うことを明らかにしてきた。日本語と英語を取り上げてみても、両言語に共通して適用される制約もあれば、一方では適用され、他方では適用されない制約もある。一方の言語に翻訳する時には、これらの制約を考慮に入れなければならないはずである。この点から、本論文では、言語学的に（正確に言うと、統語論的に）正確な翻訳とはどういうものでなければならないかを、いくつかの例を用いて論じていく。

2. 代名詞に関する制約

英語には、he, she, it, they 等の代名詞と ~self の形の再帰代名詞がある⁸³⁾。同様に、日本語にも、「彼」、「彼女」という代名詞⁸⁴⁾、 \emptyset (ゼロ) 代名詞、「自分」という再帰代名詞がある⁸⁵⁾。

日本語においても英語においても、代名詞と先行詞が coreferential であるためには、両者の間に特定の位置関係が成立していなければならない。この位置関係に対する制約が、日本語と英語では異なる。また、he = 「彼」、~self = 「自分」という対応関係があわけではないので、単純に、英語の he を日本語の「彼」で置き換えただけでは、正しい訳文は得られない。例えば、

After he₁ woke up, John Adams₁ was hungry.

の日本語訳は、

*彼が起床したあと、ジョン・アダムズは空腹であった。

ではなく、

φ 起床したあと、ジョン・アダムズは空腹であった。

となるであろう。代名詞を含む文を正確に訳すには、日・英両言語のそれぞれの代名詞の性格や照応関係に対する制約を比較・検討しなければならないのである。

2. 1 照応関係に対する構造的制約

代名詞と先行詞の照応関係を制約するのは、基本的には

- (i) 代名詞と先行詞の前後関係 (precede)
- (ii) 代名詞と先行詞の上下関係 (command)

の2つの要素である。

英語の照応関係に対する制約に関する古典的な研究は、Langacker によるものである⁹⁾。Langacker は、統御 (command) という概念を初めて導入し、英語の照応関係の制約を明らかにした。Langacker は、統御を、

a node *A* “commands” another node *B* if (1) neither *A* nor *B* dominates the other; and (2) the *S*-node that most immediately dominates *A* also dominates *B*¹⁰⁾

と定義したうえで、英語の代名詞化に対する制約を次のように述べた¹¹⁾。

NP^a may pronominalize *NP*^x unless (1) *NP*^x precedes *NP*^a; and (2) *NP*^x commands *NP*^a.¹²⁾

つまり、代名詞が、先行詞よりも前にあり、かつ、先行詞を統御している時は、両者は coreferential ではないということである。

*He₁ is much more intelligent than Ralph₁ looks.

再帰代名詞と先行詞の関係は、よく知られているように、先行詞と再帰代名詞が *clause mates* であり、かつ、先行詞が再帰代名詞の前にあることである。

Those men₁ outsmarted themselves₁.

*Themselves₁ outsmarted those men₁.

I hope that Mary₁ will wash herself₁.

*I₁ hope that Mary will wash myself₁.

次に、日本語の代名詞の照応関係に対する制約をみてみよう。

筆者自身の日本語の代名詞研究に関する論文で述べたように、次のような制約がある¹⁹⁾。

(i) ϕ 代名詞の使用に関する制約

Given a complex sentence, where NP1 is in the matrix clause and NP2 is in an embedded clause:

If NP1 is a ϕ -pronoun and NP2 is a full noun, then NP1 and NP2 are noncoreferential.

例：a. ジョージ₁は、 [ϕ ₁本を読む]_s時に眼鏡をかける。

b. * ϕ ₁ [_sジョージ₁が本を読む]_s時に眼鏡をかける。

(ii) 再帰代名詞の使用に関する制約

The antecedent of the reflexive must be the subject of a sentence and command the coreferential NP to be reflexivized.

例：a. ジョン₁は、 [自分₁がそれをした]_sことを認めた。

b. *ジョンは、メアリー₁に、 [自分₁が落第した]_sことを伝えた。

(iii) 「彼」と「彼女」の使用に関する制約

A full-pronoun [= *kare/kanozyo*] can be coreferential with an NP if the NP precedes the full-pronoun.

例：a. メアリー₁は、 [ジョンが彼女₁に結婚を申し込んだ]_s。けれど

も、うれしくなかった。

- b. *彼女₁は、[ジョンがメアリー₁に結婚を申し込んだ]₁、けれども、うれしくなかった。

まず、代名詞を含む英文を日本語に訳す場合を考えてみよう。

Algernon₁ killed the mosquito which bit him₁.

単に him を「彼」で置き換えると、

アルジャーノン₁は、彼₁をさした蚊をころした¹⁴⁾。

で適格な日本語である。

では、次の英文はどうであろうか。

The mosquito which bit him₁ was killed by Algernon₁.

him と Algernon の前後関係がそのままになるように、

*彼₁をさした蚊は、アルジャーノン₁によつてころされた。

とすると、不適格な日本語になってしまう。つまり、英語では、代名詞は先行詞を統御していなければ、先行詞より前にあってもよいが、日本語では、「彼」や「彼女」という代名詞は先行詞の前に来てはいけないからである。従って、日本語の代名詞の照応関係の制約に合うようにするには、

アルジャーノン₁をさした蚊は、彼₁によつてころされた。

としなければならない。ところが、この文は、代名詞と先行詞の前後関係からみると、

The mosquito which bit Algernon₁ was killed by him₁.

に対応する。つまり、日本語では、

The mosquito which bit him₁ was killed by Algernon₁.
 The mosquito which bit Algernon₁ was killed by him₁.

の2つの英文の違いは訳し分けられないということになる。
 では、先ほどの英文をもう一度取り上げてみよう。

After he₁ woke up, John Admas₁ was hungry.

he と John Adams の関係は、he (代名詞) が John Adams (先行詞) より前にあるが、he は John Adams を統御していないので、英文としては正しい代名詞の使用である。この英文を一語一語日本語に置き換えてみる。

*彼₁が起床したあと、ジョン・アダムズ は空腹だった。

この日本語文が不適格なのは、「彼」が先行詞のジョン・アダムズの前に来ているからであると言える。しかし、日本語の代名詞の制約に合うように、代名詞と先行詞の位置を変えてみても適格な日本語の文にはならない。

ジョン・アダムズ は、彼 が起床したあと、空腹だった。

問題は、日本語の「彼」と英語の he が一対一に対応しないことである。適格な日本語文は、 \emptyset 代名詞を使用したものである。

\emptyset 起床したあと、ジョン・アダムズ は空腹だった。

また、英語の he は、日本語の \emptyset 代名詞以外に、「自分」とも対応する。

Oscar₁ realized that he₁ was unpopular.
 オスカー₁ は、自分₁ が人気がないことを知った。

John₁ came to see me with his₁ wife.
 ジョン₁ は、自分₁ の奥さんをつれて私に会いにきた。

Everyone₁ opened his₁ book.

みんな自分の本を開けた。

一般的に言って、英語の he/she に対応するのは、「彼」「彼女」よりも、 ϕ 代名詞か「自分」である。

従って、英語を日本語に、日本語を英語に訳す時は、両言語の代名詞の制約と両言語の代名詞の対応を考慮して訳さなければならない。例えば、次の (a) (b) の英文の日本語訳はどうなるべきだろうか。

(a) Because the student_i had cheated in the exam, John scolded him_i.

(b) Because he_i had cheated in the exam, John scolded the student_i.

(a') その学生_i がカンニングをしたので、ジョンは彼_i をしかった。

(a'') *その学生_i がカンニングをしたので、ジョンは ϕ しかった。

(b') *彼_i がカンニングをしたので、ジョンはその学生_i をしかった。

(b'') ϕ カンニングをしたので、ジョンはその学生_i をしかった。

(a')が適格なのは、「学生」が「彼」より前にあるからであり、(a'')が不適格なのは、「 ϕ 」が「学生」を command しているからであり、(b')が不適格なのは、「彼」が「学生」の前にあるからであり、(b'')が適格なのは、「学生」が「 ϕ 」を command しているからである。

元の(a)(b)の英文は、代名詞の he/him と先行詞の「学生」の位置が入れ替わっただけであるが、日本語に訳す時は、代名詞と先行詞の位置関係によって、「彼」か「 ϕ 」かのどちらを使うべきかを考えなければならないのである。

2. 2 照応関係に対する機能的・語用論的制約

日本語の代名詞の使用では、機能的あるいは語用論的制約が、英語の場合よりも重要な働きをする。次の英文の日本語訳を考えてみよう。

John_i was taken to my father's hospital when he_i fainted.

この he は、「彼」と訳すべきか、「 ϕ 」とすべきか、あるいは、「自分」とすべきかを、言語学的に決定してみよう。

「自分」が使えないことは、Kuno が次のように説明している。

zibun in a constituent clause (A) is coreferential with a noun phrase (B) of the matrix sentence

- (a) if A represents an action or state that the referent of B is aware of at the time it takes place¹⁶⁾.

ジョンは意識がないのであるから、「自分」は使えないのである。

*ジョン₁は、自分₁が気を失った時、私の父の病院へかつぎこまれた。

では、「彼」は使用できるであろうか。

*ジョン₁は、彼₁が気を失った時、私の父の病院へかつぎこまれた。

「彼」も使用できないのである。許されるのは、 ϕ 代名詞である。

ジョン₁は、 ϕ_1 気を失った時、私の父の病院へかつぎこまれた。

「彼」が使用できず、 ϕ 代名詞を使用しなければならないのは、日本語の代名詞の使用に関して、次のような語用論的制約があるからである。

「彼」／「彼女」と ϕ 代名詞の使い分けに関する制約

Given a complex sentence, where the subject of the matrix clause is a full NP and the subject of an embedded clause is a pronoun, and the NP and the pronoun are coreferential:

- (a) the pronoun must be a ϕ -pronoun when the possibility is strong that the person who does the action designated by the predicate of the embedded clause is the same person who does the action designated by the predicate of the matrix clause; and

- (b) the pronoun must be a full-pronoun when the possibility is strong that the person who does the action designated by the predicate of the embedded clause is different from the person who does the action designated by the predicate of the matrix clause.

この語用論的制約からすると、「氣を失う者」と「病院へかつぎ込まれる者」は同一人物である可能性が強いので、「彼」ではなく、「 \emptyset 」を使うべきであるということになる。

3. 移動変形に対する制約

最近の言語研究が明らかにした、日本語と英語の決定的な違いは、英語は configurational language であり、日本語は nonconfigurational language であるということである¹⁶⁾。そして、英語は変形規則によって要素を移動するが、日本語は要素を移動させないということである¹⁷⁾。このことは、英語の移動規則に対する制約が日本語では適用されないことからわかる。いくつかの制約でこのことをみてみよう。

3. 1 Wh-Island Constraint

英語には Wh-Island Constraint と呼ばれる制約があり、疑問詞で始まる埋め込み文から、さらに疑問詞を取り出すことはできないとされている。Chomsky は、次のような例を挙げている。

- a. We wondered [to whom John gave the book].
 b. We found out [who wrote the book].
 c. We did [what you asked us to do about the book].
- a'. *What book did we wonder to whom John gave?
 b'. *What book did we find out who wrote?
 c'. *What book did we do what you asked us to do about?¹⁸⁾

対応する日本語の文をみてみよう。

- a. ジョンが誰にどんな本をやったのかしら。
- b. 誰がどんな本を書いたのかわかったかい。

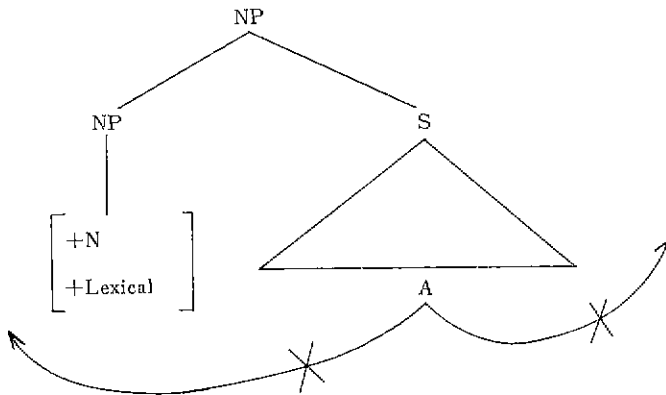
日本語では埋め込み文の中に疑問詞がいくつあってもよい。

3. 2 Complex NP Constraint

Ross の *Constraints on Variables in Syntax* では、複合名詞句制約 (Complex NP Constraint) というものが提案されている。

The Complex NP Constraint

No element contained in a sentence dominated by a noun phrase with a lexical head noun may be moved out of that noun phrase by a transformation.

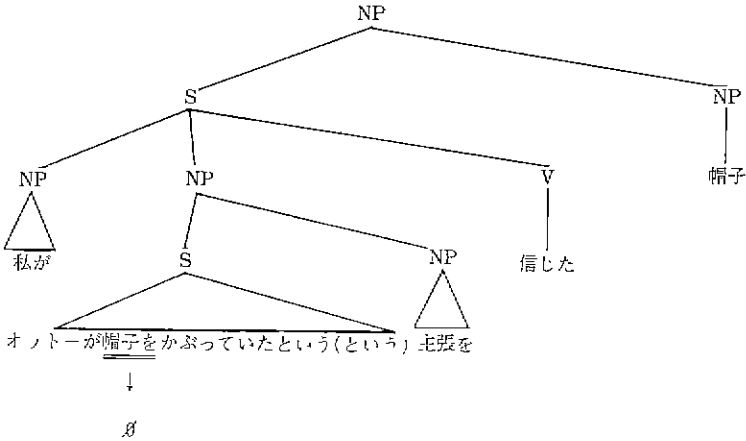


- a. I believed the claim that Otto was wearing this hat.
- b. I believed that Otto was wearing this hat.
- a'. *The hat which I believed the claim that Otto was wearing is red.
- b'. The hat which I believed that Otto was wearing is red.

a' が不適格なのは、the claim that Otto was wearing this hat という複合名詞句から hat という名詞を取り出したからである。

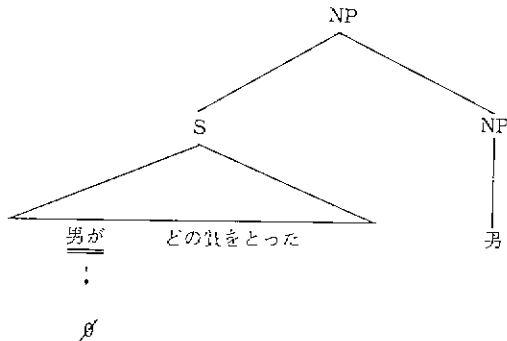
この制約は、英語にはあてはまるが、後の研究で、日本語にはあてはまらないことがわかった。a' の英文の日本語訳は可能である。

a. オットーがかぶっていたという主張を私が信じた帽子は赤い。



日本語では、関係節内に疑問詞が存在することも可能である。

どの賞をとった男をサリーはしているのか¹⁶⁹。



3. 3 日本語と英語の違いの原因

英語を基にして提案された制約が日本語にあてはまらないのは、日本語には要素を移動させる変形がないからである。Wh-Island Constraint も複合名詞句制約も、すべて、要素の移動に対する制約である。ところが、日本語の関係節変形は、削除変形であり、要素は移動しない。疑問文でも、疑問詞は基底構造で導入され、そのままの位置にある。

3. 4 翻訳の不可能性

移動変形に対する制約の有無を、翻訳という観点からみなおすと、制約のない言語から制約のある言語への翻訳は不可能という結論がでてくる。次の日本語文は、どのように英語に訳せばよいのであろうか。

- a. オットーがかぶっていたという主張をみんなが信じた帽子は、ここにある。
- b. どこでその本を買った男を知っていますか。

文字通り英語に置き換えていくと非文法的な英語の文ができる。

- a. *The hat which everyone believed the claim that Otto was wearing is here.
- b. *Do you know the man who bought the book where?
- b'. *Where do you know the man who bought the book?

まわりくどく言えば、同じ内容のことを英語でも表現できるはずであるが、ストレートな表現は不可能であろう。

4. Factive と Non-factive

Kiparsky and Kiparsky によると²⁰⁾、英語の predicate (動詞・形容詞) は、factive predicate (regret, be aware (of), comprehend, resent 等) と non-factive predicate (suppose, assert, assume, claim 等) に分類される。

Factive と Non-factive の違いは, Kiparsky and Kiparsky によると次のように説明される。

The speaker presupposes that the embedded clause expresses a true proposition, and makes some assertion about that proposition. All predicates which behave syntactically as factives have this semantic property, and almost none of those which behave syntactically as non-factives have it.²¹⁾

つまり, factive predicate の場合は, that 節が表わす内容を, 話し手は真実であると前提しており, non-factive predicate の場合は, that 節の内容を, 話し手は真実であると前提していないということである。例えば, a, b の例文では,

- a. John claimed that the earth was (*is) flat.
- b. John grasped that the earth is (was) round.

non-factive predicate である claim を含む a 文では, 話し手は「地球が平たい」ということの真実性を前提とはしておらず, 「地球が平たい」というのは, 主語である John の意見である。一方, factive predicate である grasp を含む b 文では, 話し手が「地球が丸い」ということを真実であると前提しているのである。

この factive と non-factive の区別は, 日本語では, よく知られているように, 「こと節」と「と節」の違いで表わされる。例えば,

- a. 太郎は, 地球が丸いことを知っている。
- b. 太郎は, 地球が平たいと結論した。

a 文では, 「地球が丸いこと」は話し手が真実であると前提している。一方, b 文では, 話し手は「地球が平たい」ということの真実性を前提とはしておらず, 「地球が平たい」というのは, 主語である太郎の意見である。

このように、「こと節」が話し手を前提としている真実性を表わし、「と節」はそのような前提を表わさないとすると、英語の *factive clause* は、「こと節」で、そして、*non-factive clause* は「と節」で訳さなければならないということになる。従って、例えば、次の *non-factive predicate* である *conclude* を含む次の a の英文は、b ではなく、c のように訳さなければならないはずである。

- a. Columbus concluded that the earth was round.
- b. *コロンブスは、地球が丸いことを結論した。
- c. コロンブスは、地球が丸いと結論した。

「結論する」という日本語の動詞は、「と節」しか補語としてとらないので問題は生じないが、「信じる」という動詞の場合は問題が生じる。「信じる」という動詞は、「こと節」と「と節」の両方を補語としてとるのである。*non-factive predicate* である *believe* を含む a の英文の日本語訳は b と c のうちどちらが正しいのであろうか。

- a. Columbus believed that the earth was round.
- b. *コロンブスは、地球が丸いと信じた。
- c. コロンブスは、地球が丸いことを信じた。

believe という動詞が *non-factive* である以上、正しい訳は b ということになるはずである。

では、逆に日本語から英語に訳す場合を考えてみよう。b の日本語文に対応する英文は a の文である。では、c の日本語文に対応する英文はどうなるのであろうか。「地球が丸いこと」が話し手が前提している真実性を表わしている以上、*non-factive predicate* の *believe* を使った a の英文では正しい訳とはならない。c の日本語文の意味を正確に伝えようとすれば、なにかまわりくどい表現をしなければならないであろう。

このように、believe という動詞一つをとりあげてもわかるように、正確に翻訳をしようと思うのなら、個々の単語の特徴をよく知らなければならぬということになるのである。

5. ま と め

以上、生成文法によって明らかにされた若干の文法項目を取り上げて、日本語と英語の間の翻訳に関する問題点を論じてきた。翻訳に関する語彙や発想の違いといった文化的な問題はよく論じられるが、統語論的な問題は、専門的になるので、従来、あまり論じられることはなかったと思う。正確な翻訳という観点からみて、日本語と英語の文法の対照研究の成果がもっと取り入れられるべきであることが、本稿より、理解していただければ幸いである。

注

- 1 J.C. Catford, *A Linguistic Theory of Translation: An Essay in Applied Linguistics* (London: Oxford University Press, c1965), p. 20. SLは、Source Language, TLは、Target Language の略である。
- 2 服部四郎, 『英語基礎語彙の研究』(東京:三省堂, 1968), 国広哲弥, 『構造的意味論—日英両語対照研究—』(東京:三省堂, 1967), 国広哲弥, 『意味の諸相』(東京:三省堂, 1970) 等を参照。
- 3 J.C. Catford, *A Linguistic Theory of Translation: An Essay in Applied Linguistics*, p. 21.
- 4 Noam Chomsky, *Syntactic Structures* (The Hague: Mouton, 1957).
- 5 John Robert Ross, *Constraints on Variables in Syntax* (Doctoral Dissertation; The Massachusetts Institute of Technology, 1967).
- 6 GB理論では、he, she, it, they は、pronominal, ~self やeach other は、anaphor と呼ばれ、区別されるが、ここではすべて代名詞と呼ぶ。
- 7 「彼」や「彼女」が英語のような代名詞かどうかについては議論の余地があるが、一応、代名詞としておく。Satoru Nakai, "Kare and Kanozuyo," *Doshisha Studies in English*, No. 16 (1977), pp. 147-72 を参照。
- 8 「自分」を英語と同じ再帰代名詞と呼ぶことにも議論の余地がある。
- 9 Ronald W. Langacker, "On Prenominalization and the Chain of Command,"

- Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*, eds. D.A. Reibel and S.A. Schane (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, c1969), pp. 160-86.
- 10 *Ibid.*, p. 167.
- 11 現在では, Tanya Reinhart, *The Syntactic Domain of Anaphora* (Doctoral Dissertation; The Massachusetts Institute of Technology, 1976) の c-command が使われるが, ここでは Langacker の command で十分用が足せる。
- 12 Ronald W. Langacker, "On Pronominalization and the Chain of Command," p. 167.
- 13 拙稿, "Kare and Kanozo," *Doshisha Studies in English*, No. 16 '1977', pp. 147-72, "Conditions on Zero-Pronominalization," *Doshisha Studies in English*, No. 18 (1978), pp. 43-79, "How to Use Pronouns Correctly," *Doshisha Literature*, No. 29 (1979), pp. 134-54, "Notes on Japanese Anaphora," *Doshisha Studies in English*, No. 21 (1980), pp. 69-86。再帰代名詞に関する制約は, Takatsugu Oyakawa, "Japanese Reflexivization I," *Papers in Japanese Linguistics*, Vol. II, No. 1 (1973), pp. 94-135 と Takatsugu Oyakawa, "Japanese Reflexivization II," *Papers in Japanese Linguistics*, Vol. III (1974), pp. 129-201 による。
- 14 「アルジャーノンは, 自分をさした蝦をころした」の方が自然な日本語であるが, 本文の例文でも, アルジャーノン=「彼」という解釈は可能である。
- 15 Susumu Kuno, "Pronominalization, Reflexivization, and Direct Discourse," *Linguistic Inquiry*, Vol. III, No. 2 (1972), p. 192.
- 16 Kenneth Hale, "On the Position of Walbiri in a Typology of the Base," (Indiana University Linguistics Club, 1981) を参照。しかし, Mamoru Saito, *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications* (Doctoral Dissertation; The Massachusetts Institute of Technology, 1985) にみられるように, 日本語にもやはり VP 節点が必要だという主張もある。
- 17 GB 理論では, LF のレベルでは, 日本語でも要素は移動する。
- 18 Noam Chomsky, *Rules and Representations* (New York: Columbia University Press, c1980), p. 194.
- 19 この日本語に対応する英文は不適格である。
*Which trophy does Sally know the man who won?
- 20 Paul Kiparsky and Carol Kiparsky, "Fact," *Progress in Linguistics: A Collection of Papers*, eds. Manfred Bierwisch and K.E. Heidolph (The Hague: Mouton, 1970), pp. 143-73.
- 21 *Ibid.*, p. 147.

Synopsis

Linguistically Accurate Translation

Satoru Nakai

Translation has been studied mainly from the points of view of phonological, lexical, and cultural differences between languages, and few studies have been done on the problems involving syntactic differences. The present work discusses some translation problems arising from the syntactic differences between English and Japanese.

First, the syntactic and pragmatic differences between English and Japanese pronouns are examined, and based on the examination, correct ways of translation of sentences involving pronouns are suggested.

Second, the constraints on movement transformations are picked up, and it is pointed out that English is subject to the constraints and Japanese is not. This difference causes some difficulties in the translation of Japanese sentences into English.

Third, the distinction of factive and non-factive predicates proposed by Kiparsky and Kiparsky is discussed, and some problems are pointed out which arise when a Japanese sentence containing a predicate which behaves both as a factive and a non-factive is translated into English.